

# 『三国史記』百濟本紀所載の築城用語に対する釈義

——「蒸土」をめぐる——

門 田 誠 一

## 序

人間が土を積み城や墓を造る行為は考古学の主要な研究対象として深遠ともいえる多様な論点を内包している。なかでも城は構築方法や構築素材といった基本的な要素から築城法や設計、構造にいたる複雑な側面があり、物質的な観点からでも膨大な検討要素をもっている。これらの研究を踏まえて、さらに城のもつ政治的、社会的、経済的意味に立ち入るのが本道であるが、城郭の建築材料および構造のなかには、それを築いた為政者や社会の一側面を示すものがある。それゆえに史書のなかでも、強大な権力や必要以上の奢侈の表徴として典型化されることがあり。ここにふれる「蒸土」という築城方法はその一つである。<sup>1)</sup>

朝鮮三国時代の山城や土城の研究は活況を呈しており、とくに考古学的調査の蓄積は膨大なものとなっている。けれども、朝鮮三国時代の築城方法や構造については、『三国史記』などの文献史料に具体的かつ詳細な記述が認められることは少なく、考古学資料と文献史料との対照検討ないしは包括的な視点での考究が行われることは未だ少ないように思われる。

本論では、とくに『三国史記』にみられる「蒸土」という語について、考古学資料と史書のなから同時期中の中

国における「蒸土」の実例をあげながら、これまであまり深くふれられることがないばかりか、誤解をうけていたことについて、これを正すともに、この語を用いた『三国史記』の文脈を当時の国際情勢や政治のなから読み解くことを目的とする。

# 1 『三国史記』にみられる築城法「蒸土」

『三国史記』に使用された語のなかには、その意味が今だ不確実ないしは不確定なものもあって、ここにとりあげる「蒸土」という語もその一つである。この語を分析する前に、これがどのような状況で、いかに使用されているかをみておかねばなるまい。

『三国史記』百濟本紀の蓋鹵王の二十一年（四七五）の記載には、高句麗の長寿王が兵三万を率いて、王都の漢城を包囲した際に、長寿王は前もって僧の道琳を間諜として百濟に送り込んだ、という記述がある。すなわち、道琳は高句麗で罪を得て、逃れてきたと偽って百濟に入った。そして、「博奕」を好んだ蓋鹵王の碁の相手をしてながら王に取り入り、百濟の国益のためと称して、城郭の建築や宮室の整備、先王の墓の修理などを勧めた。そして、これを然諾した蓋鹵王は国人をすべて徵発して、土を盛り、城を築いて、宮室や樓閣や高殿建築などを築き、それらは壮麗であつた、と記されている。その部分の原文は以下の通りである。

道琳曰。大王之國。四方皆山丘河海。是天設之險。非人為之形也。是以四鄰之國。莫敢有覬心。但願奉事之不暇。則王当以崇高之勢、富有之業。竦人之視聽。而城郭不葺。宮室不修。先王之骸骨權擯於露地。百姓之屋廬屢壞於河流。臣窃為大王不取也。王曰諾。吾將為之。於是尽發国人。蒸土築城。即於其内作宮室樓閣台榭。無不壯麗。（後略）<sup>2</sup>

この後にも、先王の墓槨や堰堤などを築いた記述が続く。そして、このような大規模な建築や土木工事の結果と

して、百済の米倉は空になり、民は窮乏し、国は危急の事態に陥った。道琳は高句麗に逃げ戻り、このことを報告すると、長寿王は喜んで、百済の討伐を図り、軍隊を將軍たちに委ねた。その結果として百済の都であった漢城は高句麗軍に攻略され、蓋鹵王は殺されて、百済はここでいったん滅亡することになる。その後、蓋鹵王の子である文周王が都を南の熊津へと移して再興を図ることとなる。

このような一連の文脈のなかで、百済の国勢が衰運した結果、高句麗の攻撃を容易にし、百済が滅亡にいたる浪費の一環として、道琳が時の百済王の蓋鹵王に対し、進言した建築の一つが「蒸土築城」（文中の傍線部分）であることに、着目しなければならない。すなわち、百済の国力が減退するほどの建築として、この語が使用されているのである。

この「蒸土」という語については、これまでどのような建築技術や工法をさすのかが、分明にはなっていないかった。そのなかで、『三国史記』の蓋鹵王の築城記事の解釈としては、「土城を築く時、泥土を蒸して堅く積み上げ、表面に芝生をかぶせ」たものというような解説がなされていた。<sup>(3)</sup>

同じように「土を蒸して」という解釈をとる論者のなかで、李道学氏は本稿でも後に詳しく分析する『晋書』卷一三〇・載記三〇・赫連勃勃の「蒸土築城」の記事を引いて、その強固なことを推量する材料としている。さらにソウル特別市の夢村土城に対して、木柵施設から四世紀以降に土築に改築されたことを支持し、『三国史記』蓋鹵王二十一年条の「蒸土」によって築城された城を夢村土城に比定し、蓋鹵王代に再びより強固に築造されたものと考えた。<sup>(4)</sup>

しかしながら、「土を蒸す」という解釈は甚だ具体性を欠くものであつて、そのような築城技法および土木工法存在は歴史的にも現代工法においても寡聞にして知らない。いっぽうでは、『三国史記』の百済の漢城陥落に至る重要な要素として「蒸土」の語の理解が極めて重要なことも言をまたない。

いっぽう、中国の史料上ではこの「蒸土」という語がみられる記述があり、これまでも解釈されることがあった。そして、近年では考古学的にも、それに該当する遺跡で実際の築城技法としても確認されるに至っている。よって、次にこれらに注目し、『三国史記』の「蒸土」の語の理解へとつなげることとしたい。

## 2 中国の史料にみられる「蒸土」と発掘成果による実例

中国の文献上で「蒸土」という語が城郭築造の工法として現れるのは、五胡十六国時代の大夏の皇帝である赫連勃勃が、鳳翔と改元した年（四一三年）に行つた有名な築城記事で、次のような内容である。

改元して鳳翔とした。叱干阿利という人物を築城の責任者（将作大匠）に任じ、嶺北の夷と夏の十万人を徵発し、朔方水の北、黒水の南にある都城を造営させた。（赫連）勃勃は自ら「朕は今まさに天下を統一し、万邦に君臨した。よって（新しい都城に）統万と名づけるべし」と言つた。叱干阿利は技巧にたけ、しかも残忍で凶暴でもあった。彼は「蒸土」によつて城を築き、（蒸土に）錐が一寸でも入ると、それを作つた者を殺して城壁のなかに埋め込んでしまった。（赫連）勃勃はこれを忠義であるとして、叱干阿利にすべての宮繕の任を委ねた。<sup>⑤</sup>

ほぼ同じ「蒸土」による築城記事は『魏書』鉄弗龍虎伝にもみられる。それによると、「（赫連勃勃は）性質が驕り、残虐であつて、民を草か芥のようにみている。蒸土によつて都城を築き、鉄の錐が一寸でも入ると、たちまちこれを作つた人を殺して、（それを）あわせて（城壁を）築いた」と記されている。<sup>⑥</sup>

おなじく『魏書』世祖本紀には、王公は險を設けて国を守るべしという『周易』の説や漢初に蕭何が未央宮を壮麗に造作した故事を引いて、群臣に京邑の城隍をさらに堅固にすることを建議された北魏の世祖太武帝が、いかに堅固な城でも滅ばされるものであるとして、自らが攻略した統万城の例をあげ、天下が治まっていないうちに、民力

を疲弊させる土木工事のための徵発は起すべきでなく、無為に国の財を用いることがないよう、これを否定した、という記述がみられる。<sup>(7)</sup>すなわち、ここでは統万城の「蒸土築城」の堅固さが、逆説的な意味あいでも用いられているのである。

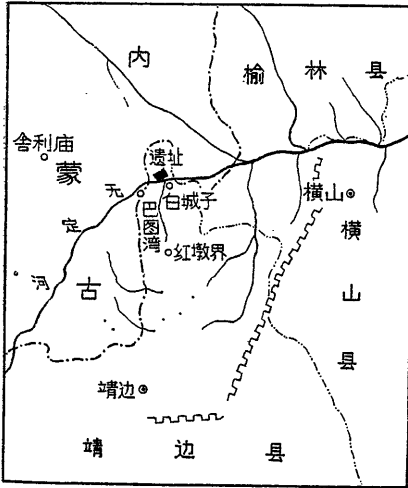
北魏・酈道元の『水経注』にも同様の記載がみられる。<sup>(8)</sup>その部分を入矢義高・森鹿三氏らは「赫連勃勃は竜昇七年（四一三）に、将作大匠の梁公叱干阿利に命じ、この奢延水の北、黒水の南で、新たに大城を築かせ、統万城と名づけた。土を蒸しあげて築造したもので、雉堞（ひめがき）は古色蒼然としたものであるが、亭亭たる墉（城壁）は新たに築いたものである」と解釈している。<sup>(9)</sup>

赫連勃勃の統万城築城については、ほぼ同様の内容および「蒸土」という語が『北史』、『新五代史』、『資治通鑑』、『冊府元龜』などの後の史書にも引かれており、史上に著聞することになる。そして、その築城記事の残忍さ、暴虐性とともに後世には詩文にも現れ、北宋の蘇軾（蘇東坡）や金末から元初の元好問の如き高名な詩人の作品にも謳われている。たとえば、蘇軾の「将官梁佐蔵が莫州に赴くを送る」という詩には、「蒸土にて城と為し、鉄を門と作す」というふうに使われている。<sup>(10)</sup>すなわち、鉄の門と対句として謳われるほどに「蒸土」は堅牢な築城技法として後世まで伝えられていたことが知られるのである。

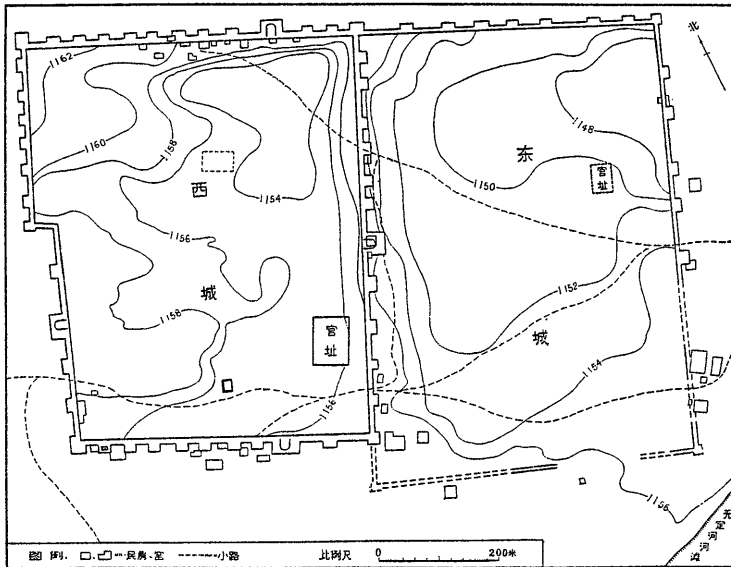
これらに見える「蒸土」の語については、入矢・森両氏のように「土を蒸しあげて」と理解する場合が多く、岡崎文夫氏も早い段階で「土を蒸して城を作り」と同様な解釈を示していた。<sup>(11)</sup>しかしながら、これが実際の築城法なしいしは土木建築工法の何をもって該当させうるのかなど具体的に論及されることは稀であった。そのなかで、ジョセフ・ニーダム氏はこれらの「蒸土」の語に注目し、「煉瓦」と解している。<sup>(12)</sup>しかしながら、焼成煉瓦とみることに慎重で、焼成していない「日干し煉瓦」の可能性を示唆する論者もある。<sup>(13)</sup>

このような解釈があった「蒸土」という語に対してはこの技法が使用されたと記されている統万城の発掘調査に

図 1



1 統万城位置図  
(スケールアウト)



2 統万城実測図

1, 2とも『考古』1981-3より

よつて実態が知られることとなつた。統万城の再発見は清代における西域研究で著聞する徐松（一七八一—一八四八）が、榆林知府に任じられた際、その時点で夏州城とされていた遺址に対して調査を命じ、これが大夏の統万城であると推斷し、後の本格的な考古学調査の端緒を開いた。<sup>14)</sup>

遺跡は内蒙古自治区との省境に近い陝西省域北西部を流れる黄河支流の無定河上流に位置し、東城と西城の二つの区画からなる不整形な平面形の都城である。統万城の規模は東壁（東城東壁）は七三七メートル、北側（東城と西城をあわせた北側の長さ）一〇六一メートル、西壁（西城西壁）七二一メートル、南壁（東城と西城をあわせた南側の長さ）一〇五一メートルで、城壁の幅はもつとも広い部分で一六メートルであり、馬面の部分では三〇メートルに達する。この遺跡では一九七五年以来、三度の発掘調査が行われ、瓦や仏像、銅印などが出土している。<sup>15)</sup>

城址の遺構や出土遺物とともに重要な成果は城壁の築造工法が判明したことである。発掘調査に際して、統万城の城壁のサンプルを分析した結果、砂、粘土、石英、水を加えた石灰を混合したものであることが判明した。石灰を主剤として粘土や砂と混合して固める方法は、土木・建築技術としては近代以降にも使用された三和土（たたき）といわれる工法である。そして、その作業過程で生石灰に水を加える際に熱が生じ、蒸気があがることを知らない記録者によつて、史料上には「蒸土」と記されたものと推定されている。（図1の1、2）<sup>16)</sup>

以上のように、近年の発掘調査によつて、五胡十六国の一つであつた大夏の城壁構築法として史料上に現れた「蒸土」が、土木工法でいうところの「三和土」に該当することが知られたことを明らかにして、次項では『三国史記』にみられる「蒸土」という語の吟味を行うことにしたい。

3 「蒸土」の史料的吟味と考古学的様態——『三国史記』にみられる中国北方の築城工法  
中国の史料にみられる「蒸土」が三和土であることが明らかになったが、これは版築などの通常の城壁築造技術

と比べて、工法としては複雑で手間のかかることが一つの特徴といえる。そして、『三国史記』の蓋鹵王の記事では、このような工法を取り入れたがために百濟は国力を損ない、その結果として、高句麗の攻撃に耐えられず、王都を失い、南へと遷都しなければならなくなった、というの文脈のなかで、この語が用いられていることが重要である。すなわち、蓋鹵王が国を傾けるに足るほどの築城方法として、「蒸土」という語をあえて使用したところに意味があつたことがわかる。

この語が百濟時代から知られていたのか、『三国史記』の編纂段階で盛り込まれたものなのかは、文献学的な検討を必要がある。この点については後に論点をまとめるが、いづれにしろ、中国北方に位置した五胡十六国の一つである大夏にまつわる築城法として文献上および考古学的に確認できる築城工法が、百濟の遷都に関わる重要な原因として記述されていることは、これまで見逃されていた点である。<sup>17</sup> それと同時に『三国史記』などに使用される用語そのものについても文献学的批判だけでなく考古学的な吟味が必要なことを示している。

一方では、「蒸土」の語の吟味に際しては、『三国史記』百濟本紀・蓋鹵王二年条そのものの解釈に関わるところが大きい。これまで、蓋鹵王二十一年の道琳による誘言の部分の記載については潤色が多く史実とは認められないとする見解もあるけれども、<sup>18</sup> 一般には史実として、長寿王から間蝶として遣わされた道琳によって惑乱された蓋鹵王が大規模な土木工事を展開して内部分裂を画策したことは周知の事実として取り扱われる場合が多い。<sup>19</sup>

また、『三国史記』の原典論の観点からも、この記事が他の史書からの仮借ではなく、確実な実録の記事であり、長寿王による道琳の派遣を含む高句麗の基本的史料の相当な部分が新羅に移されたことによつて、編纂された記事であることを想定する見解がある。<sup>20</sup> さらに、この記事を実史とした上で、道琳を用いた高句麗の画策より以上に蓋鹵王が威厳を誇示するために行ったという理解を提示する論もみられる。<sup>21</sup>

これらの解釈の当否以前に前提として、『三国史記』にみられる蓋鹵王の「蒸土築城」の記載に対して、内容の



具体的吟味を伴わず、また史料の根拠を問わずに史実としてきた面があることは否めまい。『三国史記』の原典に關しては、近年にいたって、文献史学者による精緻な研究があり、専門を異にする筆者の言及できるところは少ないが、考古学的検討に資する部分のみ閑説しておきたい。

『三国史記』百濟本紀・蓋鹵王二十一年条そのものの検討は、高寛敏氏によって行われている<sup>(23)</sup>。この記事は漢城陥落から熊津遷都にいたる記載であるが、これを高寛敏氏は、高句麗王巨璉（長寿王）が親率する三万の高句麗軍が漢城を陥落させ、（A）逃げる蓋鹵王を捕らえて害したという内容と（B）これをさかのぼって漢城攻撃までの経過とに分けて分析している。それは高句麗王と百濟王の表記が（A）ではそれぞれ巨璉、蓋鹵王であるのに対し、（B）では長寿王、近蓋鹵王とされていることを重視し、これら二つは完結した別個の所伝であつたとする。そして、（A）については『旧三国史』によつた記事とみる。「蒸土築城」の記載が含まれる（B）については土木工事の文中に出てくる地名が、『三国史記』地理志四に挙げられた「三国有名未詳地分」（『三国史記』編纂時に不明となつていた地名）では一連の『旧三国史』關係の地名とは別に記載されている点などから、『旧三国史』とは別の補助原典に基づいており、それは溫祚王紀の補助原典ともなつた地理志所引「古記」であると述べている<sup>(26)</sup>。

一方、『三国史記』に引用された中国史書について、引用字数の異同等から緻密な分析を行った田中俊明氏によると、出典を明記せずに引用した記事に対する確実な依拠書は『漢書』『後漢書』『三国志』『晋書』『梁書』『魏書』『隋書』『北史』『旧唐書』『新唐書』『通典』『冊府元龜』『資治通鑑』の十三書であると論じている。そのなかでも、出典を明記せずに引用した記事の半数が『資治通鑑』によるものであり、さらに引用の序列としては国内史料を第一に用い、それに準じて『冊府元龜』を用い、その次に他の中国史書を用いるという、『三国史記』の編集における典拠としての序列があつたことを論証している<sup>(27)</sup>。

「蒸土築城」の語が認められる中国史書は、田中氏が挙げた上記の十三書のなかでは『晋書』『魏書』『北史』

『冊府元龜』『資治通鑑』に認められるが、いずれも、大夏の赫連勃勃による築城記事ないしはそれに関連する記載であつて、蓋鹵王紀のように単体の築城用語としては現れない。加えて、田中氏は『三国史記』から一二八例におよぶ中国史書引用記事の抽出を行った。それらの引用記事のなかで、もつとも字数の少ない引用記事でも八字であり、それに次ぐものが九字、さらに次いで一〇字であることが示されている。<sup>(28)</sup>

この考証とさきの高寛敏氏の見解とを勘案するならば、蓋鹵王紀において、「蒸土築城」という四字の語が使用されている点は、中国史料の直接引用とみるよりも、『三国史記』の編纂に用いられた国内史料にすでに現れていた語と考えられる。

ここまで韓国と日本の文献的研究を瞥見してきたが、『三国史記』百濟本紀の「蒸土築城」の語が含まれる部分については積極的な根拠をあげて、文飾や後代の修辭とみる見解はみられず、むしろ史実として解する論者が多いといえよう。

ひるがえつて、「蒸土築城」の語が認められる中国史書を吟味してみると、『三国史記』において、もつとも引用頻度の高い北宋の司馬光の編纂になる『資治通鑑』や同じく北宋の王欽若らの奉勅撰である『冊府元龜』はいうに及ばず、『晋書』『北史』なども唐代の編纂になるものである。ただ『魏書』のみが北斉の魏収によつて天保五年(五五四)に完成したものであり、記載内容の偏りはおくとしても、もつとも編纂年次がさかのぼる。<sup>(29)</sup>

けれどもこれを含めて、「蒸土築城」という語が現れる中国史書のなかで、編纂年代が確実に蓋鹵王代をさかのぼるものは見出だせない。これは、ひとえに大夏による統万城の「蒸土築城」が蓋鹵王代より数十年しかさかのぼりえず、いわば同時代に近いことに起因する。

この点において、『水経注』は蓋鹵王代に、より編纂年次の近いものとして注意されるべきであろう。『水経注』を著した北魏の人である酈道元(四六九〜五二三)は蓋鹵王代にもつとも接近する。『水経注』は普通、三世紀頃

の作とされる『水経』の注であるが、酈道元はこれをただ骨格として利用したにすぎず、自らが見聞した地理的、地誌的な体験とその時点で亡佚した文献とを駆使して成された書とされている。いわば同時代の見聞や知見の横溢する内容とみられるのであつて、赫連勃勃の「蒸土」による統万城築城のことも、このような同時代の知見として認識されていたとみてよからう。酈道元が『水経注』を撰述したのは、北魏の延昌から正光年間にかけて、すなわち五一二年頃からの五二五年頃までの間とされており、成稿の時期は『三国史記』の示す蓋鹵王による熊津遷都の年次よりも遅れる。しかしながら、『水経注』の記述から、六世紀の初め頃には大夏の赫連勃勃による「蒸土築城」が広く著聞していたことが知られるのである。ひるがえつてみれば、道琳が僧として百済に潜入したとされる時期において、同時代の大夏の「蒸土」による築城が伝えられた可能性は十分に考えられ、蓋鹵王と同時代に「蒸土築城」の意味が百済においても知悉されていた蓋然性は否定されるべきではないであらう。また、『三国史記』の編纂との関わりからいうと、これに用いた国内史料にすでに「蒸土築城」の語が認められたことも十分に想定されることである。

次に蓋鹵王紀に「蒸土築城」が用いられた歴史的状況を考えてみたい。百済と南北朝期の中国との交渉は、五、六世紀を通じて南朝への遣使が中心であることは、これまでもしばしば論じられておりであつて、北魏への遣使は高句麗への脅威に対して援助をもとめた四七二年の一度だけであり、それ以前にも以降にも行われなかったとされている。この「蒸土」による築城が蓋鹵王紀の記載に認められることは、それが実際に行われた工事かどうかとは別の次元において、従来、百済との交渉が極端に少なかったとみられていた北魏や同時期の五胡十六国と呼ばれる国の情報の伝播という観点から、正式な遣使以外の接触を考える端緒とすべきであらう。

最後に蓋鹵王が「蒸土築城」を実際になし得たかどうかについて、今後の課題とともに述べておきたい。すでにふれたように蓋鹵王紀の「蒸土築城」記事に対する城郭として夢村土城を比定した李道学氏の見解が提示されてい

た。<sup>31</sup> かしながら、大夏の統万城の考古学調査によつて「蒸土」がいわゆる「三和土」の工法であることが知られた結果、そのような技法による城壁が発見されていない点から、夢村土城は「蒸土築城」記事に対応させるべきではないという一応の判断を下すことができよう。

端的に蓋鹵王紀の「蒸土築城」記事が実行されたかどうかについては、百済の王都・漢城であつたソウル特別地域の王城関連遺址から、時期的に蓋鹵王代に該当する熊津遷都直前すなわち五世紀第三四半期を大きく下らない時期に石灰分を含んだ「三和土」の工法による城壁が確認された時点で、これを証する材料が整うことになろう。

## 結 語

本論においては、まず、『三国史記』の蓋鹵王の築城記事のなかで用いられている「蒸土」の語の釈義を行うにあたり、もともと『魏書』『水経注』などの中国史料のなかで、五胡十六国の一つである大夏の築城に関する「蒸土」の語が使われていることに着目した。

そして、この「蒸土」という工法を示す史料のなかで、大夏の赫連勃勃が築いた統万城の遺址の発掘調査によつて、石灰を主剤として粘土や砂と混合して固める方法であることが判明し、日本では「三和土」と呼ばれる工法であることが知られることとなった。

そして、「蒸土」の語は、『三国史記』では百済の蓋鹵王の奢侈を表現するために選択的に使われた語であつて、その表記にあたっては、この語が複雑な工程を経て、膨大な労力を必要とする工法であつたことが理解されていたと思料する。

蓋鹵王による「蒸土築造」は史料的には『三国史記』編纂時点で存在した国内史料によるものであると考えられ、文献的研究によつても、後補または文飾の積極的な証左はあげられず、むしろ、この部分は史実とされる場合が多

い。

これらの点を勘案するならば、「蒸土」による築城が実際に行われたかどうかは別として、蓋鹵王代の百済において、大夏の赫連勃勃による統万城の「蒸土築城」が強固な城壁の典型として知悉されていたことを想定するにについては大過なからう。

このような行論に過誤なしとすれば、四七二年のただ一度の遣使を例外とすれば、史料上は途絶に近いとされてきた百済と北魏、そしてその周辺の五胡十六国と呼ばれる国々に関する情報の摂取があった可能性が指摘できるのである。

百済と北朝との関わりを示す考古学資料としては、北魏の都である洛陽の大寺院である永寧寺址から出土した籠冠を被った女性俑や僧侶の俑と扶余・定林寺址の出土のそれとの極似が知られるところであり、筆者もかつて政治的な交渉とは次元を異にする接触があったことについてふれたことがある<sup>(32)</sup>。その折には、唐・張彦遠の『歴代名画記』や『北齊書』蕭放伝などにみられる南朝・梁の王子（猶子）であった蕭放が五四八年に起こった侯景の乱によって打ち続く混乱による北齊への亡命したことやその後の宮廷での芸術的な活躍とを例証とした。そして、扶余・定林寺址出土の陶俑は北朝文化が政治的関係ではなく、仏教やそれに関わる技工といった宗教や文化の面から移入されている可能性を示したことにおいて意義深いものと述べた。

その他にも筆者は百済と中国の南北朝あるいはその周辺の国や民族との交渉のなかで、百済に直接的に文物が移入される場合のほかに、觀念や価値観、思想や制度などの形而上的なものが流入することに対して、具体的に例示することを試図している。その一環として、「蒸土築城」のように北方民族の強固な築城法として著聞していた事象が、『三国史記』に選択的に採用されている例があったことを論証した。

これに示されるように百済と南北朝時代の中国との交渉といっても、単純に考古資料の類似や影響のみならず、

当然ながら不可視の思惟や觀念、逸話や情報という複雑な次元の事象を含んでいる。これらの考究に対しては、出土遺物を物質としての形状や形態のみから單線的に捉えるのではなく、その史的背景に洞察の眼差しを注ぐという歴史学としての考古学の基本姿勢を練磨すべきことを史・資料そのものが我々に教示しているように思われる。

## 註

(1) 小稿の内容の一部は門田誠一「百済と南北朝時代の交渉―中国製・中国系考古資料の再検討―」『検証古代の河内と百済』枚方歴史フォーラム要旨集 枚方歴史フォーラム実行委員会 二〇〇一年において略述した。

(2) 『三国史記』卷二十五・百済本紀第三・蓋鹵王二十一年

(3) 金思輝訳『完訳三国史記』下 六興出版 一九八一年

(4) 李道学『百済古代国家研究』一志社 一九九五年\* 二七四〜七頁。

(5) 『晋書』卷一三〇・載記三〇・赫連勃勃

乃赦其境内、改元爲鳳翔。以叱干阿利領將作大匠、

發嶺北夷夏十万人、于朔方水北、黑水之南營起都城。

勃勃自言、朕方統一天下、君臨万邦、可以統万爲名。

阿利性尤工巧、然殘忍刻暴、乃蒸土築城、鍤入一寸、即殺作者而并築之。

現代語訳は五井直弘『中国古代の城』研文出版 一九八三年、ジョセフ・ニードム／東畑精一・藪内清監修『中国の科学と文明』第一〇卷 土木工学 思索社 一九七九年 四六〜四八頁などにもみられる。

(6) 『魏書』卷九五・列伝八三・鉄弗劉虎

性驕虐、視民如草芥。蒸土以築都城、鉄鍤刺入一寸、即殺作人而并築之。

(7) 『魏書』卷四下・世祖紀 第四下

群臣白帝更峻京邑城隍、以從周易設險之義、又陳蕭何壯麗之說。帝曰「古人有言、在德不在險。屈丐蒸土築城、而朕滅之、豈在城也。今天下未平、方須民力、土功之事、朕所未爲、蕭何之對、非雅言也。」

(8) 『水経注』一・河水

赫連龍昇七年、於是水之北黑水之南、遣將作大匠梁公叱干阿利。改築大城名曰統万城、蒸土加功、雉堞久崇、墉若新。

(9) 入矢義高・森鹿三他訳『洛陽伽藍記・水経注(抄)』中国古典文学大系第二二卷 平凡社 一九七四年 一八八〜九頁。

(10) 「送将官梁佐藏赴莫州」解釈は下記の文献を参考にした。

小川環樹・山本和義『蘇東坡詩集』第四冊 筑摩書房 一九九〇年 六六七〜七二頁。岩垂憲徳・久保天隨・釈

清潭訳『蘇東坡全詩集』第二巻 復刻版 日本圖書センター 一九七八年 八五四～七頁。

- (11) 岡崎文夫『魏晉南北朝通史 内編』平凡社 一九八九年 三二八～九頁。原著は『魏晉南北朝通史』弘文堂 一九三二年

- (12) ジョセフ・ニーダム／東畑精一・荻内清監修『中国の科学と文明』(前掲) 四六～四八頁。

- (13) 五井直弘『中国古代の城』(前掲) 五四～五頁。

- (14) 戴応新『統万城の重新発現与考古概述』『赫連勃勃と統万城』陝西省人民出版社 一九九〇年\*

- (15) 陝西省文管委員会『統万城城址勘测記』(『考古』一九八一—三)\*、戴応新『赫連勃勃と統万城』(前掲)

- (16) 陝西省文管委員会『統万城城址勘测記』(前掲)、戴応新『赫連勃勃と統万城』(前掲) 四〇～四一頁。

- (17) この点では、すでにふれたように李道学『百済古代国家研究』(前掲) では『晋書』載記の赫連勃勃による「蒸土築城」との関連を示唆していることが特筆される。ただし、築造技術の分析にはいたっていない。

- (18) 直木孝次郎『古代朝鮮における問諜の活躍』『古代日本と朝鮮・中国』講談社 一九八八年 初出は原題「古代朝鮮における問諜について」として檀原考古学研究所編『檀原考古学研究所論集』第五 吉川弘文館 一九七九年

- (19) 李基東『百済史研究』一潮閣 一九九六年\* 三三頁。また、二三、一六九頁にも同断の記述が見られる。

- (20) 姜熙求『三国史記原典研究—借字表記体系的の研究—』

- 学研文化社 一九九七年 三四三～四頁。\*  
(21) 盧重国『百済政治史研究』一潮閣 一九八八年\* 一四五頁。

- 李道学『漢城末熊津時代百済王位繼承と王権の性格』(『韓国史研究』五〇・五一合輯) 一九八五年\*  
(22) 末松保和『三国史記の経籍関係記事』『朝鮮史と史料』末松保和朝鮮史著作集6

- 吉川弘文館 一九九七年 初出は『青丘史叢』第二 私家版 一九六六年  
井上秀雄『三国史記』の原典をもとめて『新羅史基礎研究』東出版 一九七四年 初出は『朝鮮学報』四八

- 一九六八年  
田中俊明『三国史記』撰進と『旧三国史』(『朝鮮学報』八三) 一九七七年

- 田中俊明『三国史記』中国史書引用記事の再検討—特にその成立の研究の基礎作業として—(『朝鮮学報』一〇四) 一九八二年  
高寛敏『三国史記』の原典的研究『雄山閣 一九九六年 など。

- (23) 高寛敏『第一章 百済本紀の国内原典』『三国史記』の原典的研究』(前掲)

- 高寛敏『三国史記』の百済本紀の国内原典』(『大阪経済法科大学アジア研究所年報』五) 一九九三年 秋九月。麗王巨璉帥兵三万来围王都漢城、王閉城門、不能出戰、麗人分兵為四道夾攻、又乘風縱火、焚燒城門、人心危懼、或有欲出降者、王寤不知所因、領數十騎出門

西走、麗人追而害之。

(25) 蓋鹵王二十一年条の上記注(24)以下の部分。

(26) 高寛敏「第一章 百済本紀の国内原典」、『三国史記』の原典的研究」(前掲)

高寛敏「『三国史記』の百済本紀の国内原典」(前掲)

(27) 田中俊明「『三国史記』中国史書引用記事の再検討―特にその成立の研究の基礎作業として―」(前掲)

(28) 田中俊明「『三国史記』中国史書引用記事の再検討―特にその成立の研究の基礎作業として―」(前掲)

(29) 内田吟風「魏書の成立について」、『東洋史研究』二一六(一九三七年)

(30) 森鹿三「酈道元略伝」、『東洋学研究 歴史地理編』東洋史研究会 一九七〇年

(31) 李道学「百済古代国家研究」(前掲)

(32) 門田誠一「百済と南北朝時代の交渉―中国製・中国系考古資料の再検討―」(前掲)

(引用文献で末尾に\*を付したものは外国文)

【付記】 本稿は平成十四年度佛教大学特別研究費(研究題目「東アジアにおける古代城郭築造技術の研究」)の給付成果の一部である。